
世界統一

坂田銀時

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

世界統一

【Nコード】

N5335M

【作者名】

坂田銀時

【あらすじ】

西暦2040年アジアの極東島国日本、日本は世界統一に向けて行動すると表明した。当時は日本以外にも、日本の隣中華連邦、南北アメリカ大陸を領土とする神聖ブリタニア帝国、ヨーロッパを本土としアフリカ・ロシアを領土としたEU、そのほかにもオーストラリアがあった。日本は、世界統一のために他国との争いが絶えない世へと進んでいた。そして、日本は軍備を整え、世界の国々といま、争うとしていた。はたして、日本が望む未来とはそして、世界の未来はどうなっていくのであろう

ブローグ

西暦2040年アジアの極東島国日本、日本は世界統一に向けて行動すると表明した。当時は日本以外にも、日本の隣中華連邦、南北アメリカ大陸を領土とする神聖ブリタニア帝国、ヨーロッパを本土としアフリカ・ロシアを領土としたEU、そのほかにオーストラリアがあった。日本は、世界統一のために他国との争いが絶えない世へと進んでいた。そして、日本は軍備を整え、世界の国々といま、争うとしていた。はたして、日本が望む未来とはそして、世界の未来はどうなっていくのであろう。

プロローグ（後書き）

はじめまして、坂田銀時です。今回、戦国乱世と一緒に書かせてもらいます。

宣戦布告

西暦2044年、極東の島国日本が世界に向けて重大な表明をした。

「みなさんこんにちは、日本国内閣総理大臣上杉忠勝です。今日はみなさんに重大なお知らせがあります。今日この瞬間日本は世界統一への道を歩んでいくと表明します。」

日本国民、そして世界の国々を驚いた。長年中立を守ってきた日本が突如、軍事的行動に方針を変えたのであった。そして

「まず最初に、我々日本は、オーストラリアに宣戦布告する。」

日本は、まず最初に日本と対立してたオーストラリアに宣戦布告したのであった。日本はオーストラリアとは中立ころから激しく対立していた。日本は、中立を保っていたため、軍事力ははるかに上だった。そして宣戦布告をした日の翌日、日本は海軍・空軍・陸軍総勢30万の軍をオーストラリアに送った。圧倒的な軍事力にオーストラリアは、二週間で無条件降伏をした。オーストラリアは、日本領になった各国々は驚きを隠せなかった。なぜなら、日本はずっと中立を保ってきたため、日本などたやすく落とせるであろうと思っていたからであった。しかし、日本はただ二週間でオーストラリアを降伏させたのであった。日本は、次に、アフリカに目をつけた。しかし、日本とEUを経済同盟を締結させてたため、日本はEUにアフリカを売ってほしいとEUとの首脳会談で申した。そして、共同声明で

「EUと日本の間にアフリカ交換条約を締結しました。これは、アフリカを日本円で5兆円で交換するとゆう条約です。」

そゆうと日本の総理大臣とEUの代表が硬い握手をした。これで日本はアフリカも手に入れた。約4週間の間に日本は急速に領土を広げていった。そして、神聖ブリタニア帝国・中華連邦・EUが臨時の会談をした。日本の動きについての話し合いであった。そして、

ブリタニアの皇帝が

「さて、今回の日本の動きどう思いますか？」

そう、質問するとまず中華連邦の天子が

「そうですね。今回の日本の動きは、ちょっとやばいですね。このままだと、日本は本当に世界を征服してしまいますよ。だいたい、なんでアフリカを売ったんですかEU大統領さんよ」

「しょうがないですよ、だって今おれんとこ結構財政が悪くって大変なことになっているんだよ。」

そう、EU大統領が答えていたら突如

「大変です、日本軍がハワイを襲撃しました。ハワイは日本軍に占領されました。」

突如ブリタニア領のハワイを日本軍が襲撃、占領してしまった。これに怒った皇帝が

「なんたることだ、わしは決めたぞこれより日本対し宣戦布告する。」

EU・中華連邦一緒に共闘しようではないか。」

その場にいた二人はそれを承諾しブリタニア・EU・中華連邦の連合軍は日本に宣戦布告した。これより第2次太平洋戦争が開戦しようとしていた。

宣戦布告（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回、戦国乱世と一生に書くことになりました。

感想とかよろしく願います。

ハワイ攻防戦（上）

西暦2040年、神聖ブリタニア帝国・中華連邦・EUの連合国軍は日本に宣戦布告した。EU・中華連邦はアフリカに進軍し、ブリタニアは太平洋にある島々とオーストラリアに進軍した。日本は、臨時に日本防衛対策本部を設置し対策本部長は、総理大臣の上杉忠勝に決定した。

8月11日、ブリタニア軍が第二次太平洋戦争の発端となった。ハワイに、10万の軍を派遣した。日本軍はハワイ占領を阻止するため、対策本部は戦艦大和ら約100隻らの戦艦をハワイに派遣した。

そして、ハワイに派遣された日本海軍はハワイについてからさそっくハワイ占領部にハワイ防衛部を設置した。長官には日本海軍少将毛利輝信が就任した。そして、設置してすぐ作戦会議が始まった。「これより作戦会議を始める。中尉今の現状を言いなさい。」

「は、現在我々日本軍は現在ハワイ諸島全域を占領しています。そして、敵軍ブリタニア軍はサンホセ から出航し現在パルミラ島沿岸を通過中とのことです。」

「そうか、やつらめパルミラ島を通って背後から攻めようとする戦法か。」

そう少将がゆくと、大佐が突如自分が考えた作戦を言い出した。

「ちよつとよろしいですか、今考えたですけど今パルミラ島を通過中ですけど、だつちたらハワイを

守る軍と背後から攻める別働隊と二手に分けて逆に挟んでしまえば良いと思います。」

そう大佐がゆくと少将が

「よし、その作戦で行くぞ。早速準備に取り掛かってくれ。」

「わかりました。」

そうゆうとその場にいた人はその場から去っていった。そして、8

月13日夜日本海軍はハワイを出発しブリタニア軍の後追った。しかし、ブリタニア軍はそのころ、突如として進路はハワイではなくパルミラ島周辺にとどまって日本軍が来るのを待っていたのであった。そう、日本軍の作戦はすべてブリタニア軍に見破られていた。そして、日本軍がパルミラ島につくとブリタニア軍は日本軍から見えない位置から、日本軍の戦艦に砲撃した。日本軍は、不意を突かれて砲撃が命中した戦艦は海に沈んでいった。戦艦大和はすぐ砲撃体制に入ろうとしたが上空のブリタニア空軍からの爆撃を受けて砲撃ができる状態ではなくなりその場にいた日本軍別働隊は撤退を開始した。日本軍はブリタニア軍の追撃をかわしながらハワイに退却した。惨敗だった、日本軍は、大きな打撃を受けた。日本軍兵士は士気を失いつつあった。そして、戦いに勝利したブリタニア軍はハワイ本島へ向け進軍を開始した。

ハワイ攻防戦（下）

日本軍が、ブリタニア軍に敗退しハワイ本島に撤退した夜、臨時に作戦会議が本部で開かれた。

「これより臨時作戦会議をはじめ、中尉現在の情勢を申せ。」

そう、少将が中尉に命ずると中尉はすぐに現在の情勢を言い出した。「は、現在の情勢は、現在ブリタニア軍がハワイ本島に向けて進軍しています。パルミラ島の海戦で負けたため、我々の戦力は少ない。さらに、兵士たちの士気も下がっています。」

そう、中尉が報告すると少将が

「我々に残された道は、2つある。一つは、このままブリタニア軍と対決するか、二つ目はこのハワイを捨てて本国に退却するかの二つである。そこでみな意見を聞きたい。」

そう、少将が聞くとその場にいた者は黙り込み、沈黙が続いたそこに一人の部隊長が

「私は、撤退すべきだと思います。理由は、今ここでブリタニア軍と戦っても無駄な犠牲が出るだけです。だから今は、本国に撤退し体制を整えてハワイを奪還すればいいと思う。」

そう、部隊長が意見をゆうと少将が

「わかった、皆このような意見が出たがどう思う。賛成の者はその場に立つてくれ、では聞くぞこの意見に賛成のもの起立をしなさい。」

そう、少将が聞くと全員起立した。その瞬間、日本軍がハワイ撤退を決めた瞬間だった。そう、開戦してから日本軍太平洋方面は敗北したのであった。そしてその翌日、日本軍はハワイから撤退した。こうして、ブリタニア軍は、ハワイを占領した。そしてブリタニア軍は、ハワイに日本本土攻撃作戦本部を設置した。そして、作戦会議で日本本土に対して攻撃を開始すると決定し、ブリタニア軍は日本本土に向けて進軍を開始した。ブリタニア軍は、太平洋上にある

日本軍が占領した島々を撃破していった。そしてブリタニア軍は、硫黄島を簡単に占領した。こうして、ブリタニア軍の日本本土攻撃の準備が整った。そして、ブリタニアは9月11日に日本本土攻撃を開始することと決定した。日本国内閣総理大臣上杉忠勝は、中華連邦が勧告してきた無条件降伏を無視し徹底抗戦すると表明した。日本軍は太平洋側に軍を固めて、ブリタニア軍の攻撃に備えた。そして、9月11日、ブリタニア軍は日本本土攻撃を開始した、ブリタニア軍は、九州、四国、北海道を攻撃した。日本軍は、交戦するが全て敗北した、そして、本州攻めが始まった。日本軍は、敗北し後退していき、とうとう関東だけとゆうこになった。

果たして、日本の未来はいつたどこに向かうのだろうか日本人は思った。・・・

ハワイ攻防戦（下）（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回の投稿は木曜日になります。

終戦

ブリタニア軍が、日本本土攻撃作戦を開始してから、一週間ブリタニア軍は次々と日本軍を打ち破り関東以外を全て占領してしまつた。そして、ブリタニア軍は東京への進軍の準備を開始した。しかし、犠牲を少なく戦争を終わらせたい、EU・中華連邦はブリタニアに日本への無条件降伏の申し出をした。ブリタニアもこの話に乗って臨時の連合国軍首脳会談がブリタニアのサンフランシスコで行つた。

「これより、今後の行く末を決める重大な会談をはじめる。」

そう、ブリタニアの代表が言い会談が始まつた。

「それでは、今回の議題は日本への無条件降伏の確認それと、今後の日本の占領をどうするか話し合い ましょう。」

そう、中華連邦の代表がゆくとブリタニアの代表が中華連邦・EUそれぞれの代表に

「我々ブリタニアとしては、このまま東京に向かって進軍したいとこですが、今後のことを考えると東京には占領後に色々なことに役にたつつ施設とあるので、無条件降伏の進言には、賛成します。」
ブリタニアの代表がそう、意見を言う中華連邦の代表が

「我々も同じ意見です、東京には高い技術を持っていますんで、それ今後に役だせていきたいと思ひます。EUは、どうですか。」

「EUは、早く戦争を終結してほしいです。我らは、もう戦争に出すお金がないので無条件降伏には賛成です。」

「わかりました、それでは日本への無条件降伏の進言は賛成とゆうとこで、では次は、戦争終結後の日本の占領についてですが、我々ブリタニアとしてはアフリカをEUに統治してもらつてオーストラリアをブリタニアが統治します、そして太平洋上にある島々を中華連邦に統治してもらつたということ

よろしいですか。」

ブリタニア代表がそれぞれの代表に問うとそれぞれの代表はそれを承諾したそして

「それでは、本題に入ります。日本本土の統治についてですがどうしましうかね。」

中華連邦代表が日本本土の統治について問うとブリタニア代表が「それについてですが、日本本土についてですが我々ブリタニアとしては分断統治が良いと考えます。」

北海道から東北までをEUが統治して九州・四国・中国を中華連邦にそして、近畿・中部・関東を我々ブリタニアが統治するという案がベストだと考えます。」

ブリタニア代表は、そうEU・中華連邦の代表に案を提示すると中華連邦・EU代表はそれに同意し会談は終わった。そして、9月20日ブリタニア・EU・中華連邦は日本へたいして無条件降伏の進言をした。しかし、日本の首脳部は徹底抗戦を決めていたため誰もが黙殺すると思っていた。が、歴史が大きく変わる事件起きた徹底抗戦を唱えていた日本内閣総理大臣上杉忠勝が、何者かに暗殺されてしまったのである。これを受けて、首脳部は方針を変え降伏へと移りそして、「10月1日」日本は連合国軍に、無条件降伏したのであった。日本は戦争に負けたのであった。そして、連合国軍は東京に入って江戸城で降伏書に調印して、第二次太平洋戦争はこの瞬間戦争は終結したのであった、そしてその翌日分断統治が始まり占領政策が始まった。そして、日本本土は三つに分断されたのであった。

終戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は木曜日になります。

戦後

日本は、ブリタニア・EU・中華連邦の連合国軍に敗北した。そして、ブリタニア・中華連邦・EUによる日本本土の分担統治が始まった。北海道・東北をEUが統治し関東・中部・近畿をブリタニア、そして四国・中国・九州を中華連邦が統治しそして各国々によって統治が始まった。EUは、まずは復興が一番であると考え都市の復興を目指した。中華連邦は、県を廃止してその代わりに省を置いた、そして日本人に対しての権利を全て剥奪し中華人と日本人との差があった。そしてブリタニアは、日本人居住区をゲットーと名づけ、ブリタニア居住区を租界という名で呼んだ、そしてブリタニアは自国が統治するところをエリア11と名づけ日本人の名前もイレヴンそれが新しい日本人の名前であった。ブリタニアは、イレヴンにたいして弾圧を行っていた。

日本が連合国軍に敗北してから3年後、日本は復興していった特にEUが統治していたところは急成長した。中華連邦が統治していたところは、まずまず復興していた。そして、エリア11は租界はもうブリタニア本土の大都会とまったく一緒くらいになっていた。だが、ゲットーは以前と終戦直後のままであった。瓦礫がそのまま残った状態であった。そして、弾圧も続いていた。そして以前とイレヴンとブリタニア人の間には差があった。

戦後（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の小説ちょっと違和感があると思います。がそこそこはよろしくお願いします。
次回投稿は来週の木曜日になります。

日本解放戦「上」

日本敗北から7年後、皇暦2010年日本本土は大きく変わっていた、ブリタニアがほかのEU・中華連邦が統治していた領土を買収したのであった、両国は経済危機に陥っていたため金が必要となつたのであろう、すぐにブリタニアに売ったそしてブリタニアは日本本土を完全に占領したのであった。ブリタニアは、両国が統治していたとくに軍を派遣した、そしてイレヴンに対しての弾圧を開始した、都市も破壊され日本人が住む都市はもう敗戦状態の都市そのものだった。だが、ブリタニアに反逆する反ブリタニアのグループが存在していた、それは旧日本軍の軍人らが集まって組織した「日本解放軍」であつた、彼らは強大な軍事力を誇っていたなぜなら日本が早期降伏したのが原因であつた、普通は余力を残さず最後まで抵抗するが、日本は余力を残したまま降伏したから反ブリタニアとしての最後の抵抗ができるのであつた。

8月10日、日本解放軍が動き出した解放軍は博多である宣言をエリア11全体に放送した。

「皆さんこんにちは、日本解放軍リーダー織田信康と申します、日本人の皆さんそして我らの国日本を不法に統治しているブリタニアの者達、我日本解放軍はこれより日本解放のため今ここに神聖ブリタニア 帝国に対して独立戦争をする、今こそブリタニアから独立し日本人の誇り・権利・自由を取り戻そうで はないか、日本人を武器を取れ今こそ立ち上がるときなのだ、これより我ら日本解放軍は九州から攻め 上り、四国・中国と攻めて行きそして最後に東京を攻める。以上で放送を終わる。」

そしてこの放送が流れた翌日、日本解放軍は九州全土を攻め、占領し四国・中国に上陸し占領した。おして、大阪でブリタニア軍との戦い勝利し近畿を占領した。その後、司令部を京都に置き退却するブリタニア軍を追撃した。そして、とうとう、東北・中部・北海

道・関東を占領し残すは、総督府が東京のみになった。

日本解放戦「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿はちょっとわかりません。

日本解放戦「下」

日本解放軍は、東京以外すべての旧日本の領土を取り戻した。九州・四国・中国・近畿・中部・東北・北海道・東京以外の関東をすべて取り戻した。そして、日本解放軍は東京租界にあるブリタニアのエリアー１の総督府がある東京を完全包囲しいつでも東京租界を攻める準備は整っていた。そして

「これより、日本解放戦争の最後の戦いである、そうこれは我々日本人が名前を取り戻す戦いなのである

第一班は、池袋ゲットーから攻めのぼれ、第二班は東京湾から攻めのぼってブリタニア軍港を占領しろ、第三班は江戸川ゲットーから行け、第四班・第五班は太田ゲットーから攻め政庁を占領しろ、そして本隊は、新宿ゲットー方面から攻め一気にブリタニア軍を殲滅をする。わかったな」

「おー！」

「日本万歳！」

日本解放軍は総督府に最後の勧告通達書を総督に送った。しかし総督はこれを黙殺し、日本解放軍と最後の戦いが始まるうとしていた。8月15日午後9時日本解放軍は、池袋・太田・江戸川ゲットーから同時に進軍し総督府を目指した。そして東京湾から旧日本海軍の戦艦がブリタニア軍港を占領していた。そして、織田信康率いる本隊は新宿ゲットーでブリタニア軍と交戦していた。

「どうだ、ブリタニア軍の様子は？」

「は、現在東京湾方面はブリタニア軍港をすべて占領し現在海から総督府に対して砲撃をしています。それ以外は現在交戦中です。」

「そうか、で今新宿の方は？」

「現在、旧都庁前で銃撃戦が続いています。」

「なるほど、よし東新宿ゲットーに兵を差し向ける挟み撃ちにする、東京湾方面はそのまま海から砲撃し

ブリタニア軍の防衛ラインを突破せよと伝えなさい。」

「了解しました。」

「申し上げます、たった今江戸川方面から現在ブリタニア軍に押され現在後退しています。」

「分かった、東京湾方面の兵士を派遣しろ少しくらいは兵を割いてもいいだろう。」

「分かりました。」

「織田様、旧都庁の銃撃戦は我らが勝ちました。ブリタニア軍は全滅です。」

「よし、そのまま総督府に向え総督府を占領するのだ。」

「分かりました。」

織田率いる本隊は総督府を目指し進軍を開始した。ブリタニア軍を蹴散らせながら総督府を目指した。「行け！ブリタニアに死を」

「引け！撤退しろ、総督府まで撤退しろ。」

そして日本解放軍は総督府を完全包囲し降伏を進言した。総督はこれを受理し総督府を完全占領した。日本人の戦いはこうして終わった、7年間の虐げがこの瞬間終わったのであった。そして

「世界みなさん、我々日本人は今日この瞬間日本の再建を宣言する、ブリタニアからの独立を宣言するそして、我々は日本人という名前を取り戻し戻したのである、日本万歳！」

「日本万歳！」

日本解放戦「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

日本再建國計画

日本解放軍は、東京租界にあったブリタニア政庁を占領し旧日本領を取り戻した。そして、日本解放軍は日本軍の正規軍となり日本が再建國されたそして旧日本領を取り戻すため日本軍はアフリカ・オーストラリアに派遣した、アフリカはEUがなぜか突然にアフリカの統治を放棄しアフリカは無法地帯となり小さい国々が独立し争い続けた、そこに日本列島を統一をした日本軍が参戦し小さい国々は次々と日本軍が占領していったそしてアフリカ最大の国アフリカ連邦が日本に降伏しアフリカは日本が統一した。

「さて皆のも、アフリカを占領できた残るはブリタニアの統治下にあるオーストラリアだが、我々日本軍はオーストラリアに15万を派遣する、なにか意見があるもの。」

「天皇陛下、私はオーストラリアに日本軍を派遣する必要はないと思います。なぜなら、今オーストラリアではブリタニア軍とオーストラリア解放戦線が現在戦っておりまもなくオーストラリア側が勝つと思われ、そこに日本軍が来るとますます混乱し国民は苦しむだけです。今は、この戦いが終わるまで、まってオーストラリアが独立したらそこ攻めれば少ない犠牲で済みます、今この荒れはれた国土を立て直す必要があります。今だ旧新宿ゲッターではブリタニア軍の残存勢力が残っておりあちこちでテロを起こしています、今は治安回復が最優先です。」

「総理の意見は却下だ。」

オーストラリアでは、ブリタニア軍とオセアニアの海で戦っていた。ブリタニアは日本を失った今このオーストラリアだけは何としても防衛したかったのであるうブリタニアはオーストラリアに大軍を送り日本海軍に対抗した。そしてシドニー沖で日本軍とブリタニア軍との海戦が始まるうとしていた。

日本再建国計画（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の小説は、ちょっと手を抜いています。すいません。ちょっと疲れていて・・・

次回投稿についてですがしばらくお休みを取ります。

シドニー戦

ブリタニア軍と日本軍がシドニー沖で対立していた。日本軍は早期旧日本領統一のため強行突破した。双方多くの犠牲者が出た戦いであつた、ブリタニア軍は日本軍に敗れてオーストラリア本島に撤退していた、日本軍はブリタニア軍に対して追撃作戦を展開した。

「これより軍議を始める、少佐現在の情勢は？」

「現在、ブリタニア軍はガーテン島まで撤退しておりそのまま迎え撃つ準備をしています。」

「そうか、参謀どう攻める？」

「まず、クラーク島を攻めそこを拠点にしガーテン島に砲撃をし敵が混乱したところでシドニーに上陸します、後はシドニー全体を占領したら我々の勝ちです。」

「よし、その作戦で行く。」

その翌日上陸作戦が始まった、日本軍は無防備状態だったクラーク島を占領しガーテン島にたして砲撃を開始した、ブリタニア軍は混乱状態に落ち日本軍はすんなりと突破した、日本軍は一気にシドニー市内に入りブリタニア軍と戦っていた、ブリタニア軍は次々と後退し日本軍は次々と占領していった、そして日本軍はシドニー市を完全制圧した、ブリタニア軍はオーストラリアを放棄しオーストラリアは完全無法地帯となり日本軍はすんなりと占領した、日本は旧日本領を完全に統一解放した、日本再建国計画は終わったのであつた。

シド二丁戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今まで活動休止にしてすいませんでした、体育祭があつて、疲れて全然書けないと思って休ませてもらいました。

次回投稿は、来週の金曜になります。

衝突「上」

日本が、「日本再建計画」を完全に達成し日本が旧日本領を取り戻してから一か月後日本は完全に復興を成し遂げていた、ブリタニアが占領していたところと比べると急成長を成し遂げた、旧ゲットー市街は日本がブリタニアと戦争する前以上に成長しビル街へと成長していた、そして旧租界はブリタニアが統治していたところよりはるかに成長していた高速道路も完全整備され鉄道も整備されていた東京以外の大阪・京都・広島・福岡など地方の都市も成長していた、軍事の方も日本軍兵士を徹底的に訓練してきて、戦前の日本軍よりもはるかに強くなっていた。技術力もブリタニアの技術をもとに戦艦を作ったりして軍事力を強くした。

戦艦大和艦内

「艦長、しかし日本海軍結構強くなりましたね。」

「あゝそうだな、戦前よりもかなり強い軍になった。」

「都市部も完全に復興して本当に良かったですね。」

「やっと、平和な世になるな。」

「でも、どうしてこうやって日本海を巡回しないといけないのですかね？」

「それはだな、中華連邦やブリタニアの軍がいつ奇襲を仕掛けてくるか分からないから十分に警戒しないといけない。」

「そうですね。」

「艦長大変です！」

「どうした、そんなにあわてて。」

「艦長、前方に中華連邦の海軍が接近してきています。」

「砲撃はしてくるか？」

「いえ、ただこれ以上中華軍が侵入してくると。」

「うむ、武力行使もやむを得ない。」

「勧告を試みしてくれるか。」

「こちらは、日本海軍これより先はわが日本領の海域であるただちに引きなさい。」

「ドーン！」

「なんだ。」

「大変です、敵軍が砲撃してきました。」

「なに。」

敵が突然日本軍が勧告を行ったあとすぐに砲撃し日中間で海戦が始まった。

衝突「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は金曜日になります。

衝突「下」

日本海で、中華海軍と日本海軍が武力衝突した。日本海軍はあつとつてきな差で中華海軍を撃破した、日本政府は、中華連邦政府に謝罪と賠償を求めるとめ、臨時に首脳会談が東京で行われた。

「久しぶりですな、天子殿。」

「お久しぶりですな、総理。」

「さて、天子殿今回の中華海軍の日本領に侵入したのはなぜですか？」

「はて、何のことでしょうか？」

「とぼけないでくださいよ、あんたが我が国の領海に侵入しそこから武力衝突して、多くの犠牲者がたのですよ、さすがに賠償と謝罪はしてくれないと、困りますよ。」

「なんだ、あのことがそれは済まぬことをしたな、だが、あの辺は我が中華連邦の領海である侵入してきたのはあなた方日本が話です、謝罪はあなた方がして下さい。」

「なんだと、あの海は話が日本の固有の海であるだからあの海は話が日本のものである。」

「なんだその態度は、我々を怒らすとどうなるか分かっておるか。」

「いいですよ、そっちが来るなら我々はあなた方とは戦いたくないが仕方ないですね。」

「我々日本国はあなた方中華連邦に宣戦布告します。」

衝突「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

日中戦争

6月10日、日本政府は中華連邦に対して宣戦布告した。日本軍は中華連邦本土に総攻撃する基地を中華連邦の済州島におくことにした。日本軍は、15万の兵士を派遣した。

戦艦大和某所

「これより、済州島攻略の作戦会議を始める。中尉、済州島の地形とかを説明しなさい。」

「は、済州島は現在中華連邦軍が日本上陸作戦の前線基地にしようとしている島です、中央に漢？山とい う山があります近くには牛島という小さな島があります。」

「うむ、参謀お前だったらどう攻め落とす？」

「少将、まずは牛島を占領しそこに本陣を置きそこから一気に攻め落とすという作戦が良いかと。」

「よし、3つに分かれて攻めようか、西帰港、済州港そして牛島と3方向から攻める、それでよいな。」

「異議ありません。」

「それでは、夜明けとともに攻める各自自分の持ち場について待機せよ。」

「分かりました。」

6月15日6時45分、日本軍は済州島攻略作戦が始まった。日本軍は作戦どうりに3方向から始めた本隊は牛島に向い残りの部隊は西帰港・済州港の二つの港に攻撃を開始した。本隊があつけなく牛島を占領するとそこに作戦本部を置き済州島攻略基地を置いた、日本軍は、二つの港にいた中華連邦軍を撃破し済州島に上陸した、次々と中華連邦軍を撃破、壊滅させていった。そして、中華連邦軍は漢？山まで撤退した漢？山は完全に日本軍が包囲して海からは戦艦から砲撃を行っていた。中華連邦軍は、日本軍に降伏した。済州島は日本軍が占領し日本軍はここに中華連邦本土上陸作戦本部を設

置した、日本軍上層部は7月10日に中華連邦本土攻撃を開始すると決定した。

日中戦争（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。
次回投稿は、来週の金曜日になります。

交渉

日本軍の上層部が7月10日に中華連邦上陸作戦を結構することが決定し日本政府は中華連邦政府に対し臨時の講和会談を持ちかけ、中華連邦政府はこれを受け入れ一時休戦が決まり現在、日本と中華連邦の中立地帯になっている済州島で行なわれることになった、仲裁国として中華連邦と仲がいいEUに要請した。日本政府の代表として内閣総理大臣大臣の徳川家定が中華連邦政府の代表は中華連邦外務大臣の高亥がそして、仲裁国のEUからは外務大臣が向った。そして、7月1日済州島で会談がはじまった。

「はじめまして、日本政府代表徳川家定です。」

「こちらこそ、中華連邦代表高亥である。それで、こちらの方がEU代表の方です。」

「どうも。」

「それでは、今回の日中戦争の講和会談を始める。」

「それでは、双方の講和の条件を申してください。それではまず、日本政府の方からどうぞ。」

「では、さっそく我々日本政府は中華連邦政府に対して賠償金12兆円と台湾の献上を要請します。」

「では、中華連邦政府の方どうぞ。」

「では、まず日本政府に対して済州島の返還と賠償金10兆円と尖閣諸島は我らの中華連邦のものである ことを認めること、以上です。」

「ちょっと待ってください。我々は賠償金と台湾の保有を認めることだけなのに今回の戦争が始まったもと を作った中華連邦にこんなにしなくてはいけないのだ。」

「なにを申すか、戦争のもとを作ったのはあなた方日本であろうが、これは当然の措置である。」

「しかし、EU代表の方にお聞きしたいこの双方の条件どう思いま

すか？」

「確かに、中華連邦側の条件は一方的だそこで、今回の講和条約の内容は、」

日中戦争講和条約

- 一 中華連邦政府は日本政府に対して賠償金1兆円を払うこと
- 二 日本政府は中華連邦政府に対して賠償金2兆円を払うこと
- 三 中華連邦政府は日本が台湾を保有することを認める
- 四 日本政府は中華連邦が尖閣諸島を一部保有することを認める
- 五 日本政府は濟州島を中華連邦に返還すること
- 六 中華連邦政府は日本政府に対して三年間日本本土に渡航することを認めない

「以上が、日中戦争講和条約の条件だ、双方良いな。」

「我々日本政府はこれを受諾する。」

「我らも同じく。」

「やつと、日中戦争が終わったな。」

7月10日濟州島で日中戦争講和条約の調印会談が行われ双方これを調印し日中戦争が終わった。

交渉（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の金曜日になります。

新宿

日中戦争が終戦してから3か月後日本は再び平和な地になった、日本は中華連邦から払われた賠償金で国営の工場を建設したり東京の整備費などに使った、特に力を入れたところは東京の新宿だった。新宿は日本解放戦争の時、東京租界で唯一激戦区となった場所であった、新宿は今だ東京が大都市に成長してもまだ、解放戦争時の瓦礫などが今だ残っていたそれに目を付けた日本政府は東京都に対して5000億円の支援金を出した、こうして新宿の再開発が始まったまず東京都は新宿に残っている瓦礫の撤去から開始した、瓦礫の撤去後次に行ったのは道路の舗装だった、高速道路を作ったり旧山手線を新幹線専用線路に変えて新幹線を走らせたりして、交通面から回復させていったそれに伴って鉄道の駅の補修工事をしたり駅前の再開発も行った、そうして新宿再開発が始まって2ヶ月後新宿は生まれ変わった建設していた高速道路が開通し多くの車が新宿を通っているそして旧山手線は今では新幹線が通っているそして、各駅前は瓦礫だらけだった2ヶ月前と比べ物にならないほどきれいになっていった、駅前にはビルが建って多くの人が行き来している、そして次に行ったのは新宿内に次々と高層ビルを建設した、ほとんどは政府が使用するビルだったがだんだんと会社の支部のビルを建設したり高層マンションを建てたり超高層ビルを建てたり次々と新宿に高層ビルが建ち新宿は大きく成長した5か月前と比べるとその差は圧倒的だった、新宿は「第二の都心」と呼ばれるほど成長した。

新宿（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。しばらくお休みを取らせてもらいます。

今回は、「世界統一？」の最終回となります。どうぞ楽しみに
！！

日本

平和な世の中になった日本は、次々と都市再開発を行い各都市は大きく発展した日本は超経済大国となった。そして、日本政府は新しい資源が富士山にあるという情報得て政府は富士山を完全に封鎖して鉱山を建設し世界に向けて出荷していった、だがその資源は日本の平和を乱すものになるとはだれも思っていなかった。日本はその資源の分配を決める権利を持っていて、

「ブリタニア2、中華連邦2、eu3、日本3」

というふうにしていた、だが、これに反発したのは世界で唯一の超大国神聖ブリタニア帝国だったブリタニアは日本に対して分配の割合を増やすように要求してきたが日本政府はすべて拒否してきたそれに反発したブリタニアは、日本に対して宣戦布告した「第3次太平洋戦争」がはじまった。日本は突然の攻撃を受けた。日本軍は次々とブリタニア軍に撃破されブリタニア軍は日本列島を包囲し降伏を呼び掛け、日本政府はこれを受諾し日本はブリタニアに降伏した、ブリタニアは日本をエリア11とし日本はブリタニアの属領となった、そして同時に名前も奪われた「イレブン」それが新しい日本人の名前であった。皇暦2015年8月15日のことであった。

皇歴2020年、日本が神聖ブリタニア帝国に占領されて5年の月日がたった、エリア11と呼ばれる日本、エリア11内ではいまだブリタニアに反抗する勢力がテロ活動を行っていた。ブリタニア人居住区トウキョウ租界、そして「イレブン」日本人が住むゲットー、双方相当な差があったトウキョウ租界は大都市へと発展しているがゲットーは今だ瓦礫が残り倒壊したビルがいまだに残っていた鉄道も全部トウキョウ租界に持って行かれ鉄道はもう旧鉄道跡となっていた、高速道路もトウキョウ租界に全部引かれ旧高速道路はただの道路となっていた。そして、治安も悪化していった。日本は完全に消滅したのであった。

日本（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回で「世界統一？」を最終回とさせていただきます。長い間、閲覧していただきありがとうございます。

敗戦

日本が神聖ブリタニア帝国に敗北してから5年後、エリア11「日本」は大きく変わっていたブリタニア人居住区租界部は大きく発展していたがイレブン「日本人」居住区ゲットーは今だ戦争で攻撃されたビルがあつたり瓦礫があつたりしかも租界よりもはるかに治安が悪かった、エリア11の総督府があるトウキョウ租界では日本解放のためのテロがあちこちで起きているたがそのたびにブリタニア軍に撃破され日本解放のためにブリタニアに挑んだテロ組織はほとんど壊滅状態になり残っていたのは、旧日本軍を中心に組織された「日本解放戦線」西日本を中心にテロ活動を行っている「日本解放軍」そして、トウキョウ租界で確実に勢力を拡大している組織があつた「黒の騎士団」仮面の男「ゼロ」率いる反ブリタニア組織であつた。

敗戦（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回から「世界統一」シーズン2が始まります。

新宿事変「上」

日本が神聖ブリタニア帝国に占領されて五年の月日がたった、今だ日本の敗戦を認めないテロ組織がいまだに残っていた、そしてトウキョウ租界の外部シンジクゲットーでエリア11総督元イレブン（日本人）で現在は名誉ブリタニア人となって特別措置でブリタニア皇族の一員となり神聖ブリタニア帝国第十四位皇継承者木下秀政（ブリタニア名ヒデマサ・キノシタ・ブリタニア）となっている、木下秀政はブリタニア本国からさっさとシンジクゲットーに住んでいるイレブンの排除を命令されシンジクゲットーを完全包囲しヨツヤに作戦本部を設置した。

「総督、シンジクゲットーの包囲完了しました。」

「そうか、御苦労。」

「皆の者のよく聞け、我が名神聖ブリタニア帝国第十四位皇継承者木下秀政が命じるシンジクゲットーを壊滅せよ。」

「イエス、ユア・ハynes。」

そして、皇暦2020年10月10日ブリタニア軍がシンジクゲットーにいるイレブン排除作戦が始まり多くのイレブンが殺され始めた。

「どうか、お助けください。」

「悪いが、イレブンのサルはすべて殺せと上から命令が出たんでないや。」

「ちょっとまってくださ……。」

「よし、次は上の階だ。」

「総督、ワセダ区の制圧完了しました。」

「そうか、よし戦車や特殊隊も出動させよ建物に対しての破壊活動も認める。」

「イエス、ユア・ハynes。」

「総督、ダルトン部隊が何者かに撃破されました。」

「まだ、シンジクゲッターに反乱分子がいたとは全部隊に伝達シンジクゲッターにいる反乱分子も殲滅せよ。」

「イエス、ユア・ハynes」

シンジクゲッター某所

「畜生、なんでテロ組織がいるんだ。」

「テロ組織なんてこのエリア11にはまだいっぱい残ってるから、いてもおかしくないだろう。」

「そりゃそうだ、あははは・・・」

「どうした、おいどうした応答しろ。」

「・・・・・・・」

「ち、やられたか畜生いつたいこのどいつがやったんだ。」

「知りたいか。」

「誰だ。」

「だったら教えてやろう、我々は黒の騎士団だ。」

「黒の騎士団だと。」

「そうだ、そうと分かればさっさと消えてもらおうか。」

「なんだと・・・・・・」

「ふん、愚かな者たちだ、総員に次ぐ我々黒の騎士団はこれよりシンジクゲッターにいる日本人を救助するブリタニア軍を殲滅する。」

「おおー!!!」

「まず、扇の部隊は早稲田方面を、紅月の部隊は四ツ谷方面を藤堂は中野方面を頼む。」

「わかった。」

「各自の持ち場について部隊長の作戦を決行せよ。」

「おおー!!!」

「ゼロ、あんたはどうするんだ。」

「私はやらなくてはいけないことがある。」

「そうか、分かった。」

新宿事変「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

新宿事変「下」

ブリタニア軍がシンジクゲットー壊滅作戦を決行してから、数時間後シンジクゲットー内にある反ブリタニア組織がたちあがったその名は「黒の騎士団」仮面の男ゼロ率いる反ブリタニア組織だった。黒の騎士団はシンジクゲットー内にいるイレブン（日本人）を救助するべきシンジクゲットーに出撃したのであった。そして、ゼロは各方面に部隊を派遣しブリタニア軍と戦い始めた。

「扇、そっちの状況を報告しろ。」

「こっちは、ブリタニア軍と激しい銃撃戦真つただ中だ。」

「分かった、藤堂そっちはどうだ？」

「こっちも同じ状況だ、だがもうちよつとしたら敵を壊滅できる。」

「わかった、では引きつづき頼むぞ。」

「承知。」

「紅月、そっちはどうだ？」

「こっちは、一通り片付いたけどまだブリタニア軍があちこちに散らばっている状況だ。」

「そうか、よし各個撃破し敵を殲滅しろ。」

「分かった。」

「よし、だいぶ敵は片付いて来たようだな今ならいけるかもしれない。藤堂。」

「なんだ？」

「私は少し別のことをやるしばらくの指揮をお前に預けたいの？」

「どれくらいで、戻ってこられるのだ？」

「すぐにすむ、そうだな１５分ほどで終わる。」

「分かった。」

「ありがとう。」

ブリタニア軍作戦本部

「ワセダ方面が撃破されました。」

「同じくナカノ方面も撃破されました。」

「なにをやっているのだ。」

「申し訳ありません、総督。」

「申し上げます、敵軍の本拠地が分かりました。」

「どこだその場所は？」

「シブヤの旧シブヤ駅です。」

「よし、全軍をそこに向わせよお前たちも前線で指揮しろ。」

「しかし、それでは総督を守るものが。」

「構わぬ、いくつか兵を残しておる心配はない。」

「分かりました。」

ブリタニア軍は一斉に旧シブヤ駅に向ったシンジクゲッターにいた部隊もすべて移動した。

「敵が移動を開始した、これは好機だ全部隊に伝達全部隊日本人救助させることを最優先させる。」

「『承知』」

そのころ旧シブヤ駅に到着したブリタニア軍はそこに敵がいなかったに驚いていた。

「参謀、敵の姿がありません。」

「ということだ、なぜ敵がいなくなさか偽の情報か全軍本部に撤退だ。」

「イエス・マイロド。」

そのころブリタニア軍作戦本部では

「まったく、今回の損害は大きなそれにしても黒の騎士団がこれほどに戦力を持っていたとは思わなかった。」

「それは、お褒めいただきありがとうございます。」

「だれだ？」

「私ですよ。木下秀政」

「お前は、ゼロー！」

「はじめましてとあいさつしたのですがさっさと終わらせてたいのであなたには消えてもらいます。」

「待て、死ぬ前にお前の正体を知っておきたい。」

「……いいでしょう。」

そういうとゼロは自分がつけている仮面をのけた。

「私が、ゼロです。」

「お前は確か死んだはずでは。」

「死んでませんよ、俺が死ぬわけないじゃないですか。」

「まさか、ゼロの正体がこんな元皇族だなんて思わなかった。」

「そうです、神聖ブリタニア帝国元第17位皇位継承者ルルーシュ・ヴィ・ブリタニアです。」

「……そうか死んではいなかったのですね。」

「そうです、俺は今のブリタニアを壊すために地獄の底から舞い上がったのです、さて死んでもらいます。」

「待ってくれ、頼むから待ってくれ………」

「ブリタニア軍に次ぐたつた今エリア11総督木下秀政はたつた今私が殺した、大将が消えた今何をすべきか分かっていようすぐに引き上げなさい。」

「全軍撤退せよ。」

「黒の騎士団全部隊に伝達全部隊退却せよ。」

「分かった。」

エリア11総督木下秀政はゼロの手で殺されたのであった、翌日のところは大きく報道されエリア11全体が驚いた事件となった。

新宿事変「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

新総督

エリア１１（日本）の総督木下秀政が黒の騎士団首領ゼロに殺され数日後、エリア１１全体は騒然と悲しみと喜びの声が上がった。

シンジユクゲットー某所

「ゼロ、ちよつといいか？。」

「なんだ。」

「本当にゼロが秀政を殺したのは・・・。」

「そのことか、総督は私が殺したそれは事実だ。」

「そうか、な〜ゼロこれから・・・」

扇がゼロと会話していた時、テレビの番組が緊急特別番組に変わった。

「え〜突然予定していた、番組を変更してしまい申し訳ありませんブリタニア本国から緊急の会見が始まりました。」

「皆さんこんにちは、神聖ブリタニア帝国宰相シュナイゼル・エル・ブリタニアです。今回、エリア１１の総督であつたヒデマサ・キノシタ・ブリタニアが先のテロ組織壊滅作戦中に何者かに討たれなくなりました、そこでヒデマサに変わる新総督を紹介しましょう。彼女がエリア１１新総督神聖ブリタニア帝国第２皇女コーネリア・リ・ブリタニアです。」

「わたしが、エリア１１新総督に任命されたコーネリア・リ・ブリタニアです、私が総督になったからにはエリア１１にあるテロ組織を一つ残らずに殲滅する。」

「ほう、今回は皇女が総督か面白いな。」

「な〜ゼロ、あのコーネリアが出たってことは。」

「ブリタニア本国も本気を出してきた言うことだろう、とにかく今回の新宿事変で大きく損害が出たしばらくは補給に専念しよう。」

「あゝそつだな、分かった。」

新総督（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、木曜日になります。

新宿テロ「上」

新総督コーネリアがエリア11総督に就任してから2ヶ月後エリア11の治安はさらに悪化した、トウキョウ租界のあちこちでテロが相次いだ。特に目立った行動をしていたのは黒の騎士団と日本解放戦線だった。黒の騎士団は正義のためトウキョウ租界で起きている麻薬の密売をしているビルなどを襲撃した。日本解放戦線は日本独立のためあちこちにあるビルで爆破テロなどを行った。

日本解放戦線本部

「片瀬殿、次の標的はどこにしましょうかね？」

「そうだなでは、ここなんてよろしいのでは。」

「ここは、」

「トウキョウ租界の中心にあるツインタワービル通称「勝利のビル」このタワーは、我が日本がブリタニアに敗北し東京が租界になった時初めて作られた高層ビルだ、今こそこのビルを破壊し我が日本が負けてないと世間に分かせてやろうぞ。」

「そうだな、分かった。」

12月12日トウキョウ租界ツインタワービル、いつもと同じように多くの人が訪れていた。そして、それは突然起こった。

「動くな、このビルは我が日本解放戦線が占拠した。我々に従えば命はとらぬが我らに逆らえば貴様たちの命はない。」

「「分かった。」」

ツインタワービルは日本解放戦線に占領されたのであった。そして、「ブリタニアの諸君、我ら日本解放戦線が占領した。さらにこのビルにいたブリタニア人を今人質に取っている、解放してほしいなら今すぐ日本の解放を宣言しろ。それでは、いい結果が出るのを楽しみにしているよ。」

総督府

「殿下、ツインタワービルの包囲完了しました。」

「そうか、ギルフォード大義である。」

「は、ありがたき幸せ。」

「では、参ろうか。」

「イエス、ユア・ハインス。」

ブリタニア軍は、ツインタワービルを完全包囲していた。

新宿テロ「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は来週の木曜日です。

新宿テロ「下」

ブリタニア軍が日本解放戦線が立てこもりツインタワービルを包囲し3時間後エリア11総督コーネリア・リ・ブリタニアは、作戦会議を行った。

「これより、作戦会議を始める。」

「は！」

「ギルフォード今の現状を報告せよ。」

「はい、現在テロ組織は、ツインタワービルの35階に人質をそして40階のコントロールルームに首謀者がいるという情報が入っています、そしてテロ組織はビルのおちこちに爆弾を設置し爆発させています。今、無理に強行しますとビルにある爆弾が一斉に爆破しビルが崩壊します。」

「そうか、分かった。もういいぞ。」

「は！」

「さて、どうしたものかな。よし航空部隊に空から爆撃をせよ。その混乱に乗じてビルに突入一気に攻め人質を救助しテロリストどもを清掃する。」

「イエス、ユア・ハynes。」

そして、航空部隊がツインタワービルの上に到着し爆撃が始まった。あちこちに爆弾が落とされ窓などが割れ中にいた日本解放戦線は混乱に落ちついていた、だが、これだけで混乱していた訳ではなかった。「おおー！！これ以上上に行かせるものか！」

「邪魔だ、消えされ。」

「うぎゃー。」

次々に日本解放戦線の兵士がやられていった、ブリタニア軍では新たなものだった。

「これより、日本解放戦線の討伐する。我が黒の騎士団の名のもとに。」

「おおお　！！」

そう、黒の騎士団が日本解放戦線と戦っていた黒の騎士団は日本解放戦線がこのツインタワービルを襲撃するという情報を手に入れ、先に潜伏していたのであった。

「藤堂は、人質の方に回れ！扇・紅月は40階に向え首謀者を倒すのだ。」

「分かった。」

「よし、それではみな作戦ど通りに動くのだ。」

ブリタニア軍作戦本部

「殿下、大変です。」

「どうした？」

「ビルの中に黒の騎士団が潜伏していました。」

「なに、それは本当か？」

「はい、それで現在日本解放戦線と戦っています。」

「なぜだ、なぜゼロ組織同士で戦っているのだ！」

「分かりませんが、それで殿下どうしましょうか？」

「あくまで、人質を最優先する。」

「イエス、ユア・ハynes」

タワー内

「おりゃおりゃ、どけやがれ。」

「引けーうぎゃー！」

「ゼロ、コントロールルームを占拠したぞ。」

「そうか、ではこのビル全体の電気を落としてくれ。」

「分かった。」

そう言った後、ビル全体の電気が落ちた。ビル全体は真っ暗になった。

「なんだ、なにが起きているんだ？」

「我々は黒の騎士団。」

「なに？」

「このビルは我が黒の騎士団が日本解放戦線より解放した。そして、今人質は今我が黒の騎士団が救助した、よってブリタニアの方々にお返ししよう。」

「殿下、あれを人質が出てきました。」

「これで、全員このビルからいなくなった。このビルは用済みになった、それでは、これで失礼する。」

そう、ゼロが言っているとビルは爆発し倒壊した。「勝利のビル」は崩壊した。

新宿テロ「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。しばらくお休みをとります。

日本軍

トウキョウ租界のツインタワービル崩壊事件から数日後、九州エリアにある軍が現れた。九州沿岸に襲撃したのは日本の国旗を描いた戦艦が襲ったのであった。そして、その軍は九州最大の基地八力タ基地を占領した。そして、世界に向けてある声明を発表した。

「世界の皆さん、我々はここに独立主権国家「日本」の再興を宣言する。これより我々日本軍は日本解放のためブリタニア軍と決戦をする。我々についてくれるものは我々に合流しとも日本を解放しようぞ！」

その男は、独立主権国家「日本」の独立を宣言したのであったその宣言した男は元徳川内閣で副総理をやっていた山本康友だった、山本は日本がブリタニアに負けた後日本の再興を夢見て中華連邦に亡命した。そして、エリア11で黒の騎士団や日本解放戦線らの動きでエリア11全体の治安が悪化し混乱状態になったのを見て中華連邦軍に援軍を要請し今回の襲撃を行ったのであった。

関門海峡ブリタニア軍戦艦艦内

「殿下！」

「どうだ、今の状況は。」

「は、現在西エリア最大のテロ組織日本解放軍が日本軍に合流した模様です。」

「そうか、それで今九州に上陸できるか？」

「いや、現在九州沿岸で日本軍と交戦している状況です。」

「何としても、日本軍を撃破し上陸するのだ！！」

「イエス、ユア・ハynes」

九州沿岸ではブリタニア軍と日本軍があちこちで戦っていた。ブリタニア軍は日本軍と激しい銃撃戦を行ったが天候が悪化しブリタニア軍は余儀なく一時撤退した。

フクオカ基地司令部

「天は我々に味方したのだ、この戦我々の勝ちですな將軍。」

「うむ、この戦い我々の勝ちですな。今のうちに本土に連絡し新たな援軍を送ってもらおうよう頼んでみます。」

「それは、助かります。今、日本解放軍が合流した今我々はブリタニアと堂々戦える戦力を保持している。後はこのまま東方に向けて軍を進めるのみです。」

「さようですな。」

「申し上げます、サムライ同盟から合流したいと申し入れが来ました。」

「勝ったな、この戦勝ちは見えたぞ。」

日本軍に次々とテロ組織が合流しているころ、黒の騎士団では合流するかしないかの話し合いが始まった。

「ゼロ、今回の事は無視できないことだこれからどうするか君の意見を聞かせてほしい。」

「我々、黒の騎士団は山本たちには合流しない。」

「合流しないのか？」

「あれは、ただ日本を名乗っているだけで事実上は中華連邦だ。我々はそのようなものとはやっていけない。」

「そうかそれじゃあ、山本たちの件はこれくらいにして当面の目標を決めておく必要があるだろう。」

そう、軍事最高顧問の藤堂が言った。

「東京に独立国を作る。」

ゼロが独立国を作るといった瞬間団員が口々に「独立国だと。」「俺たちが国を。」「独立つて。」そんな中副指令の扇がゼロに

「待ってくれ、黒の騎士団が大きくなったとはいえ敵は世界の3分の1以上を支配する超大国、俺たちだけでそんなことを。」

「では聞こう、誰がブリタニアを倒してくれるのを待つのか待っていればチャンスが訪れると思っているのか、甘えるな自らが動かない限りそんなところは絶対に来ない。」

ゼロが団員全員に言った後一瞬沈黙したが、そのあと藤堂が

「そうか、分かった。我々は東京に新しい国家をつくる。皆もがんばってくれ。」

「はい！！」

そして、ゼロは一番隊と零番隊を引き連れて九州に向った。

日本軍（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の木曜日です。

九州攻防戦「上」

ゼロ率いる黒の騎士団は、関門海峡付近にいたそこにはブリタニア軍もいた。

「ゼロどうしてブリタニア軍の近くに來たんですか？」

扇がゼロに聞いた。

「ここなら、九州のハカタ基地にも近いしブリタニア軍と日本軍が戦っている間に九州に上陸できる。」

「でも、もし見つかったら俺たちやばいんじゃない？」

「安心しろ、あそこを見よ。」

ゼロが指した方向をみるとブリタニア軍と日本軍が激しい銃撃戦を繰り返していた。

「ブリタニア軍は日本軍と銃撃戦を繰り返しているだから、今はこの周辺の事には気づいていない。」

「そうか、なるほど。」

「扇！今のうちに九州に上陸をする。」

「分かった。」

ゼロの命令により黒の騎士団はブリタニア軍と日本軍が戦っている間に九州に上陸したのであった。

ブリタニア軍作戦本部

「ギルフォード、今の状況はどうなっている？」

「は、現在敵軍と交戦中です。」

「まだ、上陸できないのか？」

「今だ上陸に成功したところはまだありません。」

そう、コーネリアとギルフォードが話していると兵士が

「総督大変です、黒の騎士団と思われるものがキュウシュウに上陸しました。」

「何、それは本当か？」

「我々が日本軍と戦っている間にキュウシュウに上陸した模様です。」
「我らを出し抜いたか、ゼロめ!!」

九州某所

「これより作戦を伝える、まずは零番隊は私に続いて八カタ基地に乗り込むそして基地内にいる敵を混乱状態に追い込むそして、そこに一番隊が突入し一気に日本軍を叩く。」

「おおー!!!」

「では、各部隊は部隊長の命令を待て。」

団員が掛け声をし、作戦が実行させようとしていた。

そのころ関門海峡で戦っていたブリタニア軍はようやく日本軍を撃破し九州に上陸しようとしていた。

九州攻防戦「上」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の土曜日になります。

九州攻防戦「中」

ハカタ基地

「山本様、ゼロが来ました。」

「とうとう、黒の騎士団も我が軍門に降るかすぐゼロを連れてきなさい。」

「は！」

そして、数分後応接室で会談が始まった。山本が部屋に行くとそこにはゼロがいた。

「あなたが山本さんですか？」

「いかにも、私が山本です。」

「そうですか、あなが」

「それでゼロ、このたびの要件は一体何でしょう？」

「新日本政府は即刻撤退してほしい。」

「それは、なぜですか？」

「我々黒の騎士団はこの場所に新たな独立国を建国するためだ、昔の軟弱な日本を建国してもまたどこぞの国やられるだけだ。」

「ふん、あなたに一体日本のなにが分かるっていうんだ今我々日本人はブリタニア人から不当な暴力をずっとやられてきた、そんなやつらから暴力を受けて来てやり返せないというのはあまりにも不平等だから我々は、ブリタニアに我々が日本が滅んではないといううこと証明してやる必要がある、そのためには犠牲も必要だ。」

「古いな、だからあなたはブリタニアには勝てないんだ。そのような考えを持っているから日本はブリタニアに負けたんだ、そんなことも分らない奴に国を統治する権利はない。」

「なんだと、皆の者ゼロを捕まえるのだ！！」

「いいのか、もし私の身に何かあったらこのハカタ基地ご爆破するぞ。」

そうゼロが言うとゼロは、右手に起爆装置のスイッチを見せた。

「貴様！！」

「爆破してほしくなければ、我々をこの基地から安全に出してもらおう。」

「仕方ない、それじゃ我々からも条件だゼロがこの基地から出たらそちらの起爆スイッチをこちらに渡してもらおう。」

「分かった、ではこれにて。」

そうゼロが山本に別れの挨拶をしゼロはその部屋を後にした。そしてハカタ基地入り口に到着した。

「では、起爆装置を渡してもらう。」

そう日本軍兵士がゼロに言った。

「分かった。」

そう言うときゼロは起爆装置を渡した。そしてゼロは基地と逆の方向に歩きだした。

「ゼロ、これで本当に良かったのか？」

零番隊の隊長が聞いた。

「あいつらまんまと私の策にはまったなあれが偽物と知らずに。」

そついうときゼロは左手から本物の起爆装置を出しスイッチを押した、押した瞬間基地内のあちこちで爆発が起きていた。

「黒の騎士団総員に告ぐ、全軍ハカタ基地に突入し一気にハカタ基地を制圧日本軍を殲滅する。」

「お！！」

「零番隊は正面、一番隊は基地の裏側から攻める。」

ゼロは総員に作戦を伝えた。そのころブリタニア軍はハカタ基地に向って進撃していた。

九州攻防戦「中」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来週の木曜日です。

九州攻防戦「下」

黒の騎士団による爆破で基地内は混乱状態に陥っていた。

「第二倉庫が爆発しました。」

「黒の騎士団め良くもやったな、覚えておれ、ん、なんているんだギャー!!!」

黒の騎士団は基地に乗り込み次々と基地内部にある建物を占領し敵部隊を撃破していった。

ブリタニア軍作戦本部

「殿下、黒の騎士団がハカタ基地内になだれ込んだそうです。」

「なに！黒の騎士団が！」

「現在、日本軍と戦っている模様です。」

「一体何を考えているんだあの男は・・・ギルフォード我が軍も急ぎ基地に向かわせよ。」

「イエス、ユア・ハynes。」

ブリタニア軍は急ぎハカタ基地に向っていたそのころ、基地内では黒の騎士団が基地内にある建物を次々に占領していた。

「ゼロ、第三倉庫を占領した。」

「分かったでは次は、補給ができる場所を確保せよ、確保できたら連絡しろ。」

「分かった。」

「だいぶ敵は片付いたなあとは、山本を捕まえれば。」

「ゼロ、中央部に侵入したこのまま攻めのぼっていいか？」

「ああ、そのまま行き山本を確保せよ。」

「了解。」

ハカタ基地司令部

「黒の騎士団、司令部に侵入しました。」

「バカな、あんな奴らに我々は負けるのか。」

「山本殿ここは一度この基地を捨てて再起をはかってはどうか？」

「仕方あるまい、そうしましょう。」

「では一度鹿児島に行きましょう。あのならまだ防衛線が行けま
す。」

「ありがとうございます。」

「では行きましょう。」

「はい。」

山本は中華連邦の代表を引き連れて屋上のヘリポートに向った。

「動くな、黒の騎士団だ。」

「ゼロ、司令部を占領した。山本の姿がない。」

「やはりな、いないと思った。屋上に向えそこにいるはずだ。」

「分かった、屋上だな。」

そうゼロは部下に伝えた、そしてゼロに言われた屋上に向うところ
には山本がいた。

「いた、山本だ、確保しろ。」

「おおー！」

「捕まってなるものか。」

「山本殿、早く。」

「逃がすか。」

黒の騎士団の団員がバズーカでヘリのプロペラを撃ってヘリを飛ば
さないようにした。

「なんだと。」

「山本殿とおみゆけいたす、我らと一緒に来てもらいます。」

「・・・・・・」

「ゼロ、山本を確保した。」

「そうか、ではそのまま司令部に連れて行けそして眠らせておけ、
その後全部隊引き揚げろ。」

「分かった。」

部隊長はゼロに言われたとおりにし八カタ基地から引き上げた、そ
してその数時間後ブリタニア軍が到着した。

「これは一体!？」

「黒の騎士団にやられましたな。」

「ゼロめ。」

ブリタニア軍は八カタ基地を占領し山本ら元日本政府関係者10名を逮捕した、中華連邦の代表は引き渡し条約により中華連邦に引き渡した。

九州攻防戦「下」(後書き)

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は来週の月曜日です。

鎮圧処置

ブリタニア軍がハカタ基地を占領し、元日本政府関係者十名を逮捕し中華連邦の代表として山本とともに行動していた中華連邦代表は中華連邦に引き渡され、残りの十人は軍事裁判の判決により処刑されたのであった。

総督府某所

「殿下、先のキュウシユウ反乱の首謀者ら十人を今日の正午に処刑いたしました。」

「そうか、大義であるギルフォード。」

「は！それともう一つハカタ基地のことなんですが黒の騎士団により大部分が爆破されもう基地としての機能がもう残っていません。そこでハカタ基地の破棄を申し出たいのですが。」

「分かった、ではまた新しい基地を作れ。」

「イエス、ユア・ハynes。」

そうギルフォードに言うときギルフォードは部屋から出ようとした。

「ギルフォードちょっとまで。」

「なんでございましょう。殿下。」

「本国に兵の増援を要請しておけ、増援が到着すればすぐキュウシユウに派遣しろ。」

「分かりました、ではそのように伝えます。」

「頼んだぞ。」

「は！」

そうコーネリアのいいギルフォードは部屋から出た。そのころブリタニア本国ではエリア１１の事について話し合われていた。

「こたびのエリア１１での反乱どう思われます？」

「中華連邦の参戦から見れば中華連邦はエリア１１を狙っているという事が十分に分かります。」

「さすればここは中華連邦に宣戦布告し一気に中華連邦を占領しま

しょう。」

「オデュッセウス殿下はどう思われますか？」

一人の貴族が神聖ブリタニア帝国第一皇子オデュッセウス・ウ・ブリタニアに聞いてきた。

「急に聞かれてもね、もしここで判断を誤るとすべてのエリアで独立戦争の兆しを見せるかも知れなしなあ。」

「申し上げます、たった今エリア１１総督から兵の増援を要請すると申し出が来ました。」

「そうか、では殿下誰をエリア１１に派遣するかお決めください。」

「どうしたものかねえ。」

「兄上、私が行きましょう。」

そう名乗り出たのは、第二皇子のシュナイゼル・エル・ブリタニアであつた。

「行つてくれるか、エリア１１に！」

「悲しいではありませんか、人が争うのは。」

そう言い残しシュナイゼルは会議場を後にしたのであつた。そしてその数日後シュナイゼルはエリア１１に到着したのであつた。

「兄上。」

「コーネリアか久しぶりだね。」

「兄上ことびはなぜこのエリア１１に来たのですか？」

「援軍の指揮官として来たんだよ、それとこのエリア１１の内政状況も視察しかかつて思つて。」

「内政状況ですか。」

「そうだ、このエリア１１の治安状況によっては矯正エリアに格下げしなくてはならないからね。」

「分かりました、どうぞエリア１１を視察してください。」

「ありがとう、コーネリア。」

「コーネリア殿下、大変です。」

「どうした、何かあつたか？」

一人の軍人が大慌て来た。

「申し上げます、たった今日本解放戦線が声明を出し現在トウキョウ租界のトウキョウ環状線に爆弾を仕掛けたのこと。」

「な！それは本当か。」

「おそらく本当の事かと。それともうし時速50キロ以下で走行すると爆発すると言っています。」

「私が来てそうそうテロとは予想もしてなかったよ。コーネリア」

「大丈夫です、兄上すぐに片付けますよ。すぐ対策本部を設置しろ！」

「イエス、ユア・ハynes。」

鎮圧処置（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、来年になります。

トウキョウ環状線爆破テロ

ブリタニア軍トウキョウ環状線対策本部

「現在どのような状態になっている。」

「はい、現在、トウキョウ環状線には30本の列車が走っています。」

「30本も走っているのか!!」

「はい、ブリタニア鉄道エリア11支部に問い合わせましたので。」

「それで、爆弾を仕掛けたのは？」

「はい、日本解放戦線が犯行声明を出しております。」

「コーネリアは近くにあった椅子に座った。」

「それで、爆弾はいつ爆発するんだ？」

「それなんです、列車が時速60キロ以下で走行したら爆発すると日本解放戦線の犯行声明で言っています。」

「60キロ以下か、それで今は？」

「現在、ノンストップで80キロで走行させています。」

「爆弾の位置は？」

「それが、爆弾は列車内にはなかったそうです、車掌が列車内を調べてました。」

「そうか、この情報はマスコミには発表するな。列車の乗客には異常事態が発生した言うようにブリタニア鉄道に伝える。」

「イエス、ユア・ハynes。」

「殿下。」

「ギルフォードがコーネリアに話しかけた。」

「なんだ、ギルフォード？」

「恐れながら、列車内には爆弾はないのですよね。」

「ああ、そうだ。」

「でしたら、爆弾は線路内にあるのでしょうか。」

「確かにそうだな、だがもし仮に線路内にあるとして走っている列車をどうするかだが。」

「それは、列車を環状線外に脱出させてみてはどうでしょうか。」
「よし、やってみるか。」

ブリタニア鉄道エリア11支部運輸局

運輸局内は、大慌てな状況になっていた。

「局長――!!」

「どうした、こんな非常時に!」

「今、ブリタニア軍から伝達があつて列車を一台環状線外に脱出させよという命令がありました。」

「それは本当か!？」

「本当です、爆弾は線路内にあると考えており環状線外に列車を脱出させて60キロで走っても爆発はしなと考えていることです。」

「よし、分かった。トウキョウ環状線1号車をエビス駅からナカメグロ駅に停車させよ!」

「分かりました、こちら運輸局トウキョウ環状線1号車はこれよりエビス駅でポイント切り替えをしナカメグロ駅に停車する。」

「了解しました。」

1号車はエビス駅でナカメグロ駅方面にポイント切り替えをしナカメグロ駅のホームに入った。

「1号車、只今40キロで走行しています。以上ありません。」

「よし!局長!」

「うむ、環状線を走っている全車両に告げる、只今よりトウキョウ環状線から脱出する。各自運輸局の指示に従うように。」

ブリタニア軍トウキョウ環状線対策本部

「殿下、脱出させた列車は爆発しなかったそうです。」

「そうか、良かった。」

「今、残りの車両を環状線外に脱出させているいそうです。」

「分かった、脱出が終わり次第環状線をすべて閉鎖し爆弾の回収をしろ。」

「イエス、ユア・ハynes。」

こうしてトウキョウ環状線内を走っていた車両を環状線外に脱出さ

せたのであった。そして、環状線を完全閉鎖しブリタニア軍により爆弾回収が始まりそして全ての爆弾を回収したのであった。

トウキョウ環状線爆破テロ（後書き）

新年明けましておめでとございます、坂田銀時です。次回投稿は分かりません。

設立声明

日本解放戦線によるトウキョウ環状線爆破未遂テロは、爆弾をすべて回収し解決したのであった。

エリア１１総督府某所

シュナイゼルがエリア１１の治安レベルを示した報告書を見て
「うーん、エリア１１の治安は私が予想していたより悪いね」と言った。

「申し訳ありません」

「君が謝ることはない、これから良くすればいいんだから」「すいません」

エリア１１の総督コーネリアと宰相のシュナイゼルが話していた。

「このままだと、本当に格下げしなくてはいけないな」

「それだけは、避けたいです。兄上」

「そうだ、コーネリア！こんな案はどうだい？」

「どんな案ですか？」

「ブリタニアの歴史上初の試みになると思う」

「一体、何を思いついたんですか？」

コーネリアはシュナイゼルに聞いた。

「何、一気にエリア１１にあるテロ組織の大義名分をなくすことになりテロ組織は一気に壊滅する」

「そんなことができるんですか？」

「できるんだよ、この政策は、早速マスコミを呼んで会見をする」

「分かりました兄上、早速会見の準備をします」

「ありがとう、コーネリア」

そして、数時間後総督府某所。

「これより、神聖ブリタニア帝国宰相シュナイゼル様の会見を始めます」

「皆さん、今日は私の会見のためにお集まりしていただきありがとうございます」

うございます。今からのことはエリア11全体に流していただきたい、私、ブリタニア第二皇子シュナイゼル・エル・ブリタニアはフジ周辺に行政特区「日本」の設立をここに宣言します、この「日本」に手続きを行えば特区に参加することができ、イレヴンは日本人の名前を取り戻すほか、ブリタニアからの圧政や身分差別を受けることはない。つまり、イレブンとブリタニア人にとっては平等な世界ができるのです。今日はこの声明を発表するために会見をしました。それではこれで失礼します」

エリア11全体に流れたこの行政特区「日本」の設立声明はブリタニアが日本を認め、イレブンにとっては日本人の名前が取り戻せる絶好の機会となった、だが、それはエリア11にあるテロ組織は完全に大義名分を失ったのであった。

設立声明（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

行政特区「日本」「上」

シュナイゼルによる行政特区「日本」の設立の会見が終わり、次々に行政特区「日本」への参加表明するテロ組織が出てきた、さらにあの日本解放戦線までも行政特区に参加すると表明したのであった。

シンジユクゲットー某所

「なあゼロ、これから俺たちどうする？」

黒の騎士団のメンバーの扇がゼロに聞いた。

「まさかあの日本解放戦線までも特区に参加するとは思わなかった」と藤堂が言った。そのあとに、扇が

「騎士団内でも特区に参加すると言って騎士団から脱団している人もいる」

「このままだと、我が黒の騎士団は崩壊してしまふ。ゼロ、一体どうすればいい？」

藤堂がゼロに聞いた。

「・・・・・・我が黒の騎士団は、行政特区「日本」には参加しない、我が黒の騎士団は東京に独立国を作ることが目的、ブリタニアに用意された日本など真の日本の復活ではない」

「そうか、分かった」

「それが正しい判断だと思うよ」

扇と藤堂はゼロの方針を認めたのであった。

「大変だ！！」

一人の団員が会議の場に入ってきた。

「君、まだ会議中だぞ」

と藤堂が言った。

「すいません、でも大変なんですよ！」

「なんかあったのか？」

扇が団員に聞いた。

「さつき、キヨウトの方から連絡があつてこれから我がキヨウトは行政特区に参加する今後の支援は一切しないと連絡がありました」

「何!？」

「それは本当か？」

扇と藤堂は動揺した、エリア11にあるテロ組織を支援してきたキヨウトが行政特区「日本」の参加すると表明したのであつた。しかも、今まで行われていた黒の騎士団への支援をやめると通告してきたのであつた。一層、黒の騎士団の存亡が危うくなってきたのであつた。

そして、行政特区「日本」の設立日を迎えたのであつた。

「黒の騎士団総員に次ぐ、総員は式典会場を囲むようにしてその場に待機せよ」

「了解!!」

黒の騎士団は行政特区「日本」の設立式典会場を四方八方囲んだのであつた。

行政特区「日本」「上」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。次回投稿は、分かりません。

行政特区「日本」「下」

黒の騎士団が行政特区日本の設立式典会場を包囲し、そして式典が始まった。

「只今より行政特区日本の設立の式典を始めます」

司会進行が行政特区の設立の式典を始めると宣言した、式典の映像は全世界に発信されて生中継で行われたいた。

「それでは、国歌斉唱」

そう司会者が言っているとブリタニアの国歌が会場中に流れた時、事件は起きた。

「日本人よ！本当にこのままブリタニアに屈していいのか!？」

会場に映像を映しパネルにゼロが映ったのだ。

「ゼロ、なぜここに」

「まさか、降伏に来たのか？」

会場にいた人間が次々に言いだした。

「日本人よ本当にこのままでいいのか、このまま行政特区日本に参加してもそれはまだブリタニアに屈したという事にあなる、ブリタニアに要された日本など日本の復活ではない、だから私は今ここにブリタニアからの独立を宣言する、我々が作る国はかつての日本の復活を意味しない様々な人種と歴史、主義を許容する広さを持ち、強者が弱者を虐げないことを自負する国家だ、その名は合衆国日本！さあ、日本人よ我々の力でブリタニアに勝ち新しい未来を築こう！！黒の騎士団よ、会場に突入しブリタニア軍を壊滅させるのだ」そうゼロが言った瞬間、会場周辺にいた黒の騎士団は一斉に式典会場周辺にいたブリタニア軍に攻撃したのであった、だが、ブリタニア軍はこれと呼んでいたのか兵士を大量に投入していたのであった、次々に倒れていく黒の騎士団の団員、そしてブリタニア軍は黒の騎士団を殲滅させたのであった。エリア11最大のテロ組織黒の騎士団はここに潰えたのであった、そして、その翌日行政特区日本の設

立式典がやり直され、行政特区日本は正式に認められたのであった。これにより、エリア１１の治安レベルは大幅に上がり生産力もアップしエリア１１は衛星エリアに格上げされ、そして、エリア１１全体が行政特区日本になったのであった。

神聖ブリタニア帝国は、e u に対し宣戦布告し勝利をおさめ中華連邦に対しては、自国の皇女と天子の婚儀を成立させ実情の勢力下に置いたのであった。こうしてブリタニアは世界統一を果たしたのであった。

行政特区「日本」「下」（後書き）

こんにちは、坂田銀時です。今回の作品をもちまして「世界統一」を最終回とさせていただきます。今までご覧いただきありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5335m/>

世界統一

2011年8月18日12時29分発行